

夢もう一度アフリカへ

横浜市鶴見区保健所

土井 やすみ

マラウイをご存知？

1月と言えば、雨期も本格的。今年の雨は十分だろうか。メイズ(主食になるとうもろこし)の育ちはどうだろうか。

遠いとおい国アフリカ・マラウイに心を馳せる。どしゃぶりの雨の中を裸同然の姿で食料を求めてやって来た母親と赤ん坊の姿が、入院患者であふれかえる小児病棟が目に見えよう。

私は、1989年4月から2年間、青年海外協力隊に保健婦としてマラウイ共和国へ派遣された。

マラウイという国をご存知だろうか。マラウイはアフリカ大陸南東部に位置し、モザンビーク・ザンビア・タンザニアと国境を接する内陸国である。国土面積は日本の約1/3の大きさで、世界で11番目に大きいマラウイ湖があり、国土の1/5の面積をしめている。犬養道子氏は『国境線上で考える』(岩波書店)の中で「みどりしたたるマラウイ」と称したが、実に豊かな緑と水を湛えた美しい国である。その大自然の中から飢えや貧しさは微塵も感じられない。しかし、発展途上国の例外に漏れず人々の暮らしは決して豊かであるとはいえない。

保健婦活動の中で

私は国立ゾンバ総合病院というところで、主に母子保健活動業務に従事した。活動の中心は車で村々をまわり、乳幼児健診と妊産婦健診を行なうことであった。

活動の中で衛生統計をまとめたのでその一部をみなさまにご紹介しよう。

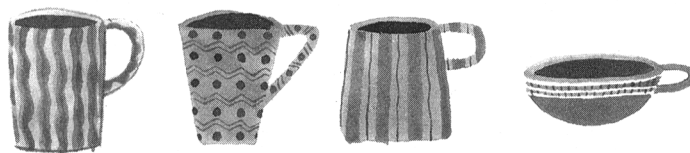
マラウイはほかのアフリカ諸国と同様、人口動態統計に基づく健康指標や疾病統計がほとんどない。近年においては、1987年に国勢調査(10年ごと)が行なわれ、ある程度の保健水準が把握されている。1977年から1987年までの自然増加率は、3.66%、出生率人口1000対54.0、死亡率人口1000対21.8、乳幼児死亡率出生1000対151といずれも高く、高出生率・高死亡率そして人口増加も激しい国といえる。この数値を長寿国世界一の日本と比較してどうだろうか。うーん絶句。

死亡の動向

死因統計や疾病統計は病院報告に基づくものではないので、マラウイのすべてを言いえているわけではないが、傾向をうかがうことができる。まず急性感染症として、肺炎や麻疹あるいは胃腸炎が死因の上位を占めている。破傷風の死亡数も多く、専門家の介助なしの自宅分娩が新生児破傷風の大きな原因であるといわれている。慢性感染症として、結核は発生数・死亡数ともに多い。性病は、梅毒・淋病ともに蔓延し、エイズ発病者は急増しており深刻な問題である。また節足動物媒介伝染病としてマラリアも重要で、マラリアで病院を訪れる患者は後をたたない。この国においてマラリアに一度も罹ったことのない人は皆無といってもよいのではないだろうか。

母子保健

先に述べたように出生は年々増加している。Child Spacing と呼ばれる家族計画・避妊指導は



各地で行なわれているが、この名のとおり産児コントロールするものではなく、産む間隔をあけて母体への弊害をくい止め、健康な子供を産もうというものである。しかし、住民に教育・指導・普及するにはさまざまな問題があり、普及率はわずか1%といわれている。

西暦2000年までに100%の子供たちに予防接種をといわれ、その努力もなされているが、出生の増加にあわせて接種数が増加しているとはいいがたい。乳幼児死因の10位以内に麻疹・破傷風・結核が含まれており、予防接種の完全実施が強く望まれる。麻疹による乳幼児死亡者の中にはすでにワクチンが施されている児も含まれている。これはワクチンの管理不備が考えられる。

と、まあ、こんな風に挙げればきりが無い。帰国してから5年が経とうとしている。その後改善はみられているだろうか。

何故アフリカへ？そして今思うこと

青年海外協力隊への参加動機の中で私は次のように述べていた。「なに不自由なく暮らせる日本。しかし豊か過ぎるが故の弊害を感じる。アフリカの人々……自然の中であるがままに生きている彼ら、少なくとも私にはそう思える。彼らと生活することによってなにかが見出せるかもしれない。生きることの原点に立てるかもしれない。そう、私は自分の中にある不安や疑問を解決するなにかを探しにアフリカへいくのである」。なんだか照れくさくもあり、いきがっていた自分がいたように思う。

アフリカへ発ったのはちょうど30歳のとき。20代の私は、生きることの意味や役割が見出せず、ずーっとあがき続けていた。2年間の生活は、言葉や文化や習慣の違いから決して楽しいことばかりではなかった。しかし、だからこそ、しっかりと自分と向かい合うことができたともいえる。今、自分自身が感じていることをそのまま感じとること、どんな社会に生きようと自分をごまかさず、自分から逃げず正直に見つめることが大切だと思えた。

現在私は、マラウイで知り合った夫と1歳の息子、4月に生まれる予定である赤ん坊の3.5人暮らし。実に平凡な生活。20代の頃には絶対におもしろくないだろうと思った生活を送っている。夫との暮らし、子供の日々の成長に「毎日、今がいちばん幸せ」と感じる自分がいてなんと不思議。私の夢は、家族と一緒にもう一度アフリカを訪れること。どんな風に感じる自分がいるのだろうか。

最後に帰国して奇妙に映ったベスト3を記す。

- ・店頭で並べられたあまりにもきれいな野菜たち
- ・バスが1分遅れたら時刻表を見なおし、5分遅れたらイライラ、ブーブーする人々
- ・夜の10時頃、スナック菓子を食べながら塾から帰宅している小学生

次は「坂田助産所」「女性のためのバイオセラピー」を開業されてご活躍中の坂田美穂子さんにバトンタッチします。この私も乳腺炎に罹り、オッパイの手当てをしていただきました。地域のお母さま方にも同僚の保健婦にも大人気の助産婦さんです。どうぞよろしくお願いします。